

ディケンズの見たアメリカ
——人種、奴隷、国家——

山本まゆみ

はじめに

小説家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) は一方で生涯ジャーナリストでもあった。ジョン・ドルー (John Drew) は *Oxford Reader's Companion to Dickens* の中でジャーナリスト・ディケンズの経歴を 3 期に分けている。すなわち 1831 年から 1836 年の新聞記者とスケッチ作家、1834 年から 1849 年の評論雑誌記者と時事問題解説者、1846 年と 1850 から 1870 年の新聞と雑誌の編集者の時代 (Drew 304-308) である。

16 歳のディケンズは速記の専門書を入手し、1829 年初めに民法博士会館で速記者として雇われ、1831 年には彼の父と共に『ミラー・オヴ・パーラメント』紙 (*The Mirror of Parliament*) のスタッフに加わった。しかし速記の仕事は国会開会中のみなので、1833 年 12 月に『マンスリー・マガジン』誌 (*The Monthly Magazine*) に短編を投稿した。1834 年から 2 年以上の間、駅馬車にのって記者として活動したディケンズは 1865 年にその経験を決して忘れないと述べた (Drew 305-306)。

ドルーはジャーナリストを“investigative”(「悪事、不正などを徹底的に調査し追及する」の意) と表現し、ディケンズの *The Uncommercial Traveller* (1860) をジャーナリストとしての申し分のない技術の証拠となると述べた (Drew 307)。ドルーの結論はディケンズの雑誌と新聞のジャーナリズムの中に小説と同じ芸術家としての手腕が見いだせるというものであった (Drew 308)。

ディケンズは速記記者から、国会報道記者へと転身し、20 歳になったころに叔父のジョン・バローが創刊した週刊新聞『ミラー・オヴ・パーラメント』の議会報道記者となり、ジャーナリストとしての人生を開始した。1833 年には投稿した短編が『マンスリー・マガジン』誌に掲載され、1834 年には『モーニング・クロニクル』紙 (*The Morning Chronicle*) に記者として採用された。そしてジャーナリストと作家の二つの特質を併せ持つ作家ディケンズは雑誌、新聞の中から育っていったのだ。1836 年には 24 歳で月刊誌『ベントリーズ・ミセラニー』誌 (*Bentley's Miscellany*) の編集長となり、同時に作品 16 ページ分を毎号執筆した。1846 年には日刊新聞『デイリー・ニューズ』 (*The Daily News*) の初代編集長となり、1850 年には週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』誌 (*Household Words*) を創刊し、この時から 20 年間、彼はジャーナリスト兼作家として働き、1859 年から 1870 年に亡くなるまでは週刊誌『オール・ザ・イヤー・ラウンド』 (*All the Year Round*) を編集した (植木 475-490)。

1842 年に出版された『アメリカ紀行』 (*American Notes*) は身体障害者の教育施設や福祉施設、監獄、精神病院の見聞、奴隷制度などが詳細に描写され、特にその第 7 章はほとんどが監獄についての記述であふれている。アメリカの長所よりも短所を取り上げることが多

いのがディケンズである。アメリカから帰国後、1844年に出版された『マーティン・チャズルウィット』(*Martin Chuzzlewit*)では主人公マーティンがアメリカへ行き、アメリカの実態に失望する。アメリカは近視眼的でほら吹き、虚栄心に満ちた国だと批判されている。

本稿では、ジャーナリストの経歴がその後のディケンズの作家としての活動にどのような影響を与えたのか、第2の時代に焦点を合わせて、『アメリカ紀行』と『マーティン・チャズルウィット』の2作品をもとに探っていきたい。最初にディケンズがアメリカを旅行した1842年頃が、どのような時代であったか、主に英米関係を中心に資料を基に検討する。次に2作品の詳細を知るためにそれぞれの内容や書かれた状況、さらに人種、奴隷、国家などがどのように扱われているかを探る。そして2作品のある場面の分析から、旅行記と小説の相違を具体的に把握する。最後に約10年後に書かれた“The Noble Savage”に見られる激しいracismとの関連も考察するつもりである。

1. 『アメリカ紀行』——ディケンズの見たアメリカの諸問題

(1) 当時の英米関係

カナダは1791年に、アメリカ独立戦争の影響で立憲制を許された。しかし差別政策などに対する不満から1807年に本国イギリスに対して反乱を起こした。その後ナポレオン戦争に付随して英米戦争(1812-14)が起こった。アメリカ軍は一挙にカナダを征服しようとしたので、カナダの農民は武器をとってイギリス軍とともに土地を守りアメリカ軍をやぶった。こうして英米戦争はカナダの統一をかため、アメリカ合衆国との合同の方向を失わせた。その後カナダではイギリスに対する不満が高まり統治機構の民主化等を要求する運動がおこった。これをイギリス官憲が無視したために本国からの分離思想が急速に広がって、1837年武装反乱に入った。この反乱はイギリス軍によって打ち破られたが、1840年イギリスはカナダの自治、議会の設置を承認した。以上がカナダ、アメリカ、イギリス三国の当時の状況である(大野 527-528)。

さらに1830年代の後半から英米関係は緊張の度合いを高め、「第3次」米英戦争を危惧させる程になっていた。すなわちアメリカ船キャロライン号がイギリス軍とカナダ人により破壊された1837年の「キャロライン号事件」、奴隷を乗せたアメリカ船クレオール号がイギリス軍に拿捕された1841年の「クレオール号事件」などが起こったが、ディケンズがアメリカを後にして2ヶ月ほどたった1842年8月に一連の紛争はウェブスター・アシュバートン条約によって一応の解決をみたのである(川澄 2007: 152-53)。

ディケンズがアメリカを訪れた時の大統領はウィッグ党のジョン・タイラーだったが、1842年7月10日弾劾の動議が出され、一方、対立政党の民主党は勢力を伸ばし、1844年の選挙で民主党のジェームズ・ポルクが大統領に選出された。こうした状況の中でディケンズの主張する国際著作権の確立は困難になっていった(川澄 1998: 138)。

(2) アメリカでの旅程

1842年1月4日の昼過ぎのこと、ディケンズは蒸気定期船「ブリタニア号」に乗りリヴァプールから出港した。1月22日土曜日に18日間の航海の後、アメリカ東海岸のボストンに到着した。彼の辿ったルートは、東海岸はボストン、ニューヘイヴン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントンおよびリッチモンドで、西部へはボルティモアからハリスバーグ、ピッツバーグを経てオハイオ川を下り、途中シンシナティ、ルイヴィルに立ち寄り、ケアロでミシシッピ川に出て、さらに北上してセント・ルイスに至っている。

西部からの帰路は、シンシナティまで戻り、コロンバスからエリー湖、バッファローに至り、ナイアガラの滝を見ながらカナダへ入る。カナダに1ヶ月ばかり滞在した後、ニューヨークに戻り、帰国の途についた。ディケンズと共に旅をしたのは妻のキャサリン、家政婦のアン・ブラウン、そしてボストンで秘書として雇ったアメリカ人のジョージ・パトナムの3人だった（川澄 2007: 156-157）。

(3)アメリカの監獄、奴隷、国民性

ディケンズがアメリカへ渡った1842年はドルーの分類では二番目の時期に当たり、もうすでにジャーナリストとして働き始めてから10年以上が経過している。ディケンズは友人で彼の伝記を書いたジョン・フォスター(John Forster)が編集する新聞『エグザミナー』(*The Examiner*)に、この頃広い分野に関する記事を寄稿していた(Drew 306)。

1月22日土曜日に蒸気定期船「ブリタニア号」でボストンに到着したディケンズは、パーキンズ視力障害者協会マサチューセッツ園を訪れ、目と耳の不自由な少女に出会う。次に精神障害者のための州立病院、矯正院の囚人たち、裁判所などを訪問する。ハートフォードでは精神病院、そして世界最高の州立監獄の記述がある。ニューヨークでも「墓場」と呼ばれる有名な監獄を訪れ、3ページにもわたって詳細にその光景を説明している。所々に悲惨な状態の黒人の描写もある。

ニューヨークからフィラデルフィアに到着し、その章のほとんどが「東部重罪監獄」の描写である。そして独房監禁の制度を残酷で誤ったものだと批判している。哀れな囚人たちへのディケンズの心情が述べられ、もはやアメリカ探訪というよりアメリカの監獄探訪へと変化しているようだ。第8章は唾液に満ち満ちている。ワシントン訪問中のディケンズはその都市をタバコ臭唾液総本部と形容し、不愉快で吐き気を催すほどだと告白している。また初めて奴隷たちに給仕された経験については恥と自責の念でいっぱいになったと述べている。国会議事堂をすばらしい建物と賞賛はしているが、アメリカの長所より短所を取り上げることが多い。ジョン・タイラー大統領との謁見でも彼に対する賛辞は表面で、囚人の描写とは全く異なる。

ワシントンから蒸気船と馬車と鉄道を利用してリッチモンドに到着し、破滅と退廃の空気が奴隷制度と不可分のものだと感じた。最初、南部のチャールストンへ行くつもりだったディケンズは絶えず奴隷制度のことを考えながら過ごすことが苦痛だと思い、西部へ行くことにする。ボルティモアではすばらしい監獄と州矯正院、ハリスバーグでも独房監禁の制

度を採用しているモデル監獄を見学している。そして西に向かう蒸気船に乗ってピッツバーグからシンシナティへ向かう。その船上でディケンズは大きな塚に葬られている多くのインディアンたちへの憐れみの情を示す。さらにルイヴィルへ向かう蒸気船でインディアンのチョクトー族の酋長であるピッチリンと長時間にわたって話をして、彼の話す英語が完璧で、教養もあるが彼の部族がやがて消滅してしまう運命であることを示している。ミシシッピ川もディケンズにとっては熱病とマラリアと死の温床になる忌まわしい川である。

次にセント・ルイスから引き返しミシシッピ川を下りルイヴィル、コロンバスへと進む。さらにサンダスキーに到着し、エリー湖のほとりのホテルに滞在し、バッファローからナイアガラを目指す。そしてトロントで最初に注目するのはやはり監獄で、州都トロントの名誉となる立派な石造りの監獄だと賞賛している。次にキングストンに到着すると監獄を訪問し、女性の囚人の中で、20歳になる美しい娘について約1ページにわたって説明している。彼女は1837年カナダでの暴動の間、秘密文書の運搬役として行動した。ディケンズは蒸気船でニューヨークへ向かい、その後、故郷へ向かって出発した。

旅行記の後に奴隷制度という見出しの章があり、ここではアメリカの奴隷制度を激しく批判し、怒りの言葉を記述する。すなわち「アメリカの《自由》は奴隷たちを叩き斬り、切り刻むのだ。そして。その気晴らしが果たせないとなると、その《自由》の息子たちはそれらをもっといい用途に、つまりお互い同士に向けあうのだ」(Dickens 243)。

最後の章は結びの言葉で、アメリカ国民の一般的特質を述べ、アメリカ人の欠点は普遍的不信感(移り気で、変化好きの性格)だと述べ、またアメリカの新聞界は品性下劣であると指摘している。そして忌まわしい怪物、醜悪な機関で、黒い魔の手を持つと表現されている。この書の最後に“[...] as I have written the Truth in relation to the mass of those who form their judgments and express their opinions, it will be seen that I have no desire to court, by any adventitious means, the popular applause.”(Dickens 252)とジャーナリスト・ディケンズとしての宣言が行なわれている。

『アメリカ紀行』が1842年10月に出版されると、その反応は賛否両論に分かれた。しかしイギリス国内では最初の週に3千部が売れ、ディケンズは千ポンドの利益を得た。作品の賛否にかかわらず、一般の読者には一応受け入れられた(川澄 1998: 233)。ドルーは『アメリカ紀行』が、その場面のすべての印象を捕えようとする試みへのジャーナリスティックな強い関心を示していると指摘した(Drew 307)。確かに真実の追求という点でディケンズはジャーナリストの資質を『アメリカ紀行』の中で大いに示しているといえるだろう。なお Sachéverell Sitwell は『アメリカ紀行』の序文で、ディケンズを救貧院、監獄、そして精神病院へと導くのは、彼自身の個人的好みばかりでなく、その時代のビクトリア朝の心的傾向の一部だったと書いている(Dickens vi)。

2. 『マーティン・チャズルウィット』——ディケンズの見たアメリカの小説化

(1) 小説に描かれた国民性と奴隷制度

最初にチャズルウィット一族の系譜が述べられる。彼らの先祖はウィリアム征服王と一緒にイギリスに渡来し、1605年には火薬陰謀事件に参加し、近代になって石炭屋の商売を始めた。

ウィルトシャーの村に住む建築家ペックスニフ氏は弟子を受け入れる時、親や保護者を罠にひっかけ、謝礼金を巻き上げている。助手のピンチは彼の正体を見抜かず、信頼感を持っている。近くの旅館にペックスニフ氏のいとこである老紳士マーティン・チャズルウィットが若い婦人メアリーと一緒に来る。老紳士は孫の若いマーティンに不信感を抱いている。

この村に老マーティンの財産を目当てに一族の者たちが次々と集まってくる。彼らはメアリーが老マーティンの財産をねらっていると思い、彼女の毒殺を主張する。その間に老マーティンはメアリーと共に馬車で去ってしまった。

その後、若いマーティンがペックスニフ氏の新弟子としてやって来ると、製図の課題を与えてから、1週間の予定でペックスニフ氏はロンドンへ出かけていく。そこで老マーティンと会い、孫のマーティンが勝手に結婚を決めたことを理由に、ペックスニフ氏の家から追っ払うように頼まれる。その結果、若いマーティンはすべての人間が平等だと言われるアメリカへ行くことを決心する。

若いマーティンは恋人メアリーにアメリカ行きの決心を告げ、新しく雇った召使いのマーク・タプリーと共に快速定期航路船「スクルー号」で航海する。マーティンは自分がお金がないために三等船客と一緒にいることが恥だと考える。

ニューヨークに到着すると、1人の紳士がマーティンにイギリスはみじめさ、貧困、無知、犯罪を偉大なる共和国アメリカの胸に植え付けようとしていると話す。その紳士の名はダイヴァー大佐で、ニューヨーク・ラウディ・ジャーナルの編集者である。マーティンはジャーナルを読み、人身攻撃的で、しかも手紙が偽造されていると感想を述べる。

大佐が紹介する下宿屋へ行くと、そこには4頭の豚がいる。中にはたん壺につばを吐くポーキンズ少佐がいて、黒人の青年がテーブルを準備している。2時の食事時には食堂で20人ほどの人々が驚くほどのスピードで食事をして、デザートや話し合いのひとときはない。その理由はアメリカ人が忙しい国民なので暇がないからだ。紳士たちの会話はただのひと言、ドルで要約できる。

召使いのタプリーと一緒にいた黒人キケロは元奴隷で、手足に切れ目を入れられ、形がくずれるほどなぐられ、首と手首と足首に鉄の輪をはめられていた。今は自分の自由を買い取り、娘の自由も買い取ろうとしていた。マーティンの出会ったアメリカ人女性は黒人が奇妙で滑稽な人種で、人間的なけだものだと断定する。さらにマーティンがスクルー号の三等船客だったと知ると、文無しの赤の他人を迎え入れたことを屈辱と感じる。

自由と圧制の国アメリカでは自動車も婦人車、男子車、黒人車に分かれている。マーティンとマークは快適な婦人車でエデンの谷をめざす。まず最初にエデン開拓地事務所へ行き、そこで土地代金150ドルを払う。その後、見学したある大会で、直前まで人々が支持していたアイルランドのダニエル・オコネルが奴隷制度廃止論者であるとわかったとたんに非難

されるのを見て、マーティンは共和国の旗が遠くでみると陽気な旗だが、近くに寄って裏側に光を当てるとまったくお粗末ないかさまものだと感じる。その大会には奴隷制度廃止論者を裁判ぬきで絞首刑にすると宣言する愛国者などが出席していた。マーティンは無理矢理、接見会を開かされ人々と握手する。エデンの谷へ出発する寸前に、その土地に行った人間で、生きて戻った者はいないと知らされる。

到着したエデンは恐ろしい沼地で、ドアのないみじめな丸太小屋で、マーティンは大声で泣き出した。そこにいるアメリカ人開拓者ハンニバル・チョロップはつばを吐きながら、自分は自由崇拝者でリンチ法と奴隷制度の首尾一貫した支持者だと自己紹介する。そしてアメリカは地球の模範で、地球の知性、美德、人間性の精髓、道徳の力の精華と考えている。

マーティンは熱病にかかり死の瀬戸際に立っていたが、マークの看病で回復する。ところが今度はマークが病気になる。マーティンは看病しながら自分の利己主義を自覚し、その気持ちを根こそぎ引き抜いてしまわねばならないと誓う。エデンの地によって彼は徹底的に打ち倒され、それと同時に、高いところに引き上げられた。マーティンは失敗を認めイギリスに戻ろうとする。3週間後、二人は船に乗る。

蒸気船の中でマーティンはアメリカ国会議員のエライジャー・ポグラムに紹介される。ポグラムはイギリスが専制君主と暴君により落日の中にあると言う。それに対しマーティンは拳銃、ナイフ、決闘、街路での射殺や刺殺がアメリカの制度なのかと反論する。さらにアメリカ人が食事に殺到し、きたならしく食べて、わが身を豚にしていると批判する。

マーティンとマークはニューヨーク近くまで行き、スクルー号に乗船する。マークはアメリカの国旗のワシを描くなら、近視眼的な点でこうもり、ほら吹き、点でちゃぼ、正直さの点でかささぎ、虚栄心の点でくじゃく、頭をどろの中につっこみ誰も見ていないと思っている点でダチョウのように描くと述べる。

二人はイギリスに到着する。そしてマーティンは祖父に会い自分が変化したと話し、過去に対する悔恨の情を示し、まともな仕事につける援助を求める。老マーティンとマーティンは和解して、この物語は終わる。

(2) 『マーティン・チャズルウィット』の評価

北川悌二訳の『マーティン・チャズルウィット』の上巻、巻末の解説では、佐野晃が、この作品を前期の作品で、後期の作品への大きな飛躍の第一歩となったと述べている(602-603)。さらに前期の小説は全体の構想が弱く、場面の描写に重点が置かれ、それはジャーナリストティックであり、ピカレスク小説に通じる特質でもあると指摘している(600)。

『マーティン・チャズルウィット』は1843年1月から1844年7月までの19ヶ月にわたり月刊分冊で刊行されたが、売れ行きが2万部と芳しくなく、ディケンズは主人公の青年マーティンをアメリカへ行かせることにした(603-604)。この旅はマーティンの根性を叩き直す試練の旅で、その際のアメリカ文明批判は『アメリカ紀行』より一層皮肉で批判的であると述べられている(611)。

出版当時の批評を見ると、1844年10月26日の『エグザミナー』紙のフォースターによる批評がある。彼は『マーティン・チャズルウィット』がディケンズの最上の作品であると評価し、アメリカのエピソードについては先例がないほどのアメリカ人の怒りを呼び起こしたが、イギリスにもペックスニフのような悪人がいるのだと述べている (Collins 184)。また、1861年7月の『ナショナル・レビュー』誌の匿名記事では、ディケンズは喜劇作家として知られていて、時々その喜劇的な部分が不愉快なほど長くなると書かれている。そしてアメリカの描写が現実のアメリカより滑稽であると批判されている (Collins 195)。

(3)ディケンズのアメリカ批判

『マーティン・チャズルウィット』の翻訳の解説で佐野晃が、与えられた、あるいは見聞した事柄をできるかぎり効果的に生き生きと描き出すことが要求された、ディケンズの通信員としての修業が初期の作品の形態の基調の一つだと指摘している (600) ように、『マーティン・チャズルウィット』は『アメリカ紀行』の余韻の残る作品である。特にアメリカへ主人公マーティンが渡る場面は『アメリカ紀行』の苦い体験がディケンズの心にはっきりとよみがえり、ジャーナリスト・ディケンズが前面に激しく現われて、アメリカ批判を繰り広げる。

エデンの谷で、アメリカとイギリスの文化が対決し、衝突させられ、つばを吐くハンニバル・チョロップがアメリカそのものとして描かれる。彼はマークがエデンを沼地だと言うと、それはヨーロッパ的な考えだと答え、イギリスの窓税、絞首台、さらし台などはアメリカにないと自慢する。マークの方はアメリカには税を課そうにも窓がないと皮肉を言う。このようにして二人は旧世界と新世界の比較談義を続け、最後にハンニバルはアメリカ人が示す歯は狂暴だから、イギリス人はアメリカ人をほめそやしたほうがいいと脅して出ていく。このハンニバルの描写の中には当時の英米関係が見え隠れする。

ジャーナリスト・ディケンズは隠そうとしているが、アメリカ旅行中の1842年3月15日に、ワシントンから友人フォースターへ送った手紙の中には、ディケンズのアメリカに対する本音が書かれていた。

‘I said I wouldn’t write anything more concerning the American people, for two months. Second thoughts are best. I shall not change, and may as well speak out—to *you*. They are friendly, earnest, hospitable, kind, frank, very often accomplished, far less prejudiced than you would suppose, warm-hearted, fervent, and enthusiastic [...] But I don’t like the country. I would not live here, on any consideration. It goes against the grain with me. It would with you. I think it impossible, utterly impossible, for any Englishman to live here, and be happy. I have a confidence that I must be right [...].’

(Forster 331-332)

ある時は小説家として、またある時はジャーナリストとしてディケンズは、『アメリカ紀行』と『マーティン・チャズルウィット』で、彼自身の体験したアメリカの真の姿を伝えようとした。

3. 『アメリカ紀行』と『マーティン・チャズルウィット』が示すアメリカの真実

初期の作品においてディケンズにはジャーナリストの要素が小説家の要素より多くを占めていた。読者にとって興味深いと思われる事実を詳しく正確に読者に伝えようというジャーナリストの眼がディケンズを支配し、楽しくなるかもしれなかったアメリカ旅行は、アメリカ人の大歓迎の裏のアメリカの真実を探り出し、読者に伝えるものとなった。

1842年10月出版の『アメリカ紀行』と1843年1月から1844年7月まで月刊分冊で刊行された『マーティン・チャズルウィット』のアメリカについての記述を比較すると興味深い事実が見えてくる。共通する事項を取り出すと①町なかの豚、②国民性、③唾を吐くこと、④新聞、雑誌、⑤若い女性のエピソードがある。

①の町なかの豚は『アメリカ紀行』では第6章でニューヨークのブロードウェイに現われる。丸々と太った2匹の雌豚と6匹の紳士豚が近くにおいて、その他に野良犬に片方の耳を食いちぎられた豚もいる。彼らは都市の道路清掃係で、夕闇が迫る頃に集団でうろつく描写されている。また第12章でもルイヴィルで道路に横たわる豚が現われディケンズは兄弟豚の争いを観察している。『マーティン・チャズルウィット』では第16章で同じニューヨークのブロードウェイに4頭の豚がいて、さらに2、3の友人が加わり、一緒になって仲良くみぞでころがりまわっていた。この後に描かれるアメリカの人々の食事の場面は驚くほどのスピードで鶏肉、カキ、漬け物などが食べられ、まるで動物の食事のようである。

②の国民性を『アメリカ紀行』では、最後の章、第18章結びの言葉で、アメリカ国民の一般的特質として述べている。まずその美点は率直で、勇気があり、誠実で、もてなしの心に厚く、情愛が深いところで、教養と洗練が彼らの愛情と熱情をひたすら高めていると賞賛している。そして欠点については彼らの普遍的不信感を挙げ、その邪な精神が彼らアメリカ人を非常に移り気で、変化好きの性格にしていると指摘し、さらに要領のいい取引を好むことを挙げ、その結果、多くの悪党が立派な人たちに混じって意気揚々と振る舞うことを可能にしていると述べている (Dickens 244)。

一方『マーティン・チャズルウィット』では奴隷制度との関連で、黒人に読み書きを教えるのは、町で公然と黒人を焼き殺すことより、もっとはかり知れぬほど罪が重くて危険なこととした自由で平等な法律が紹介され、マーティンはアメリカの旗を遠くで見ると陽気な旗だが、近くによるとお粗末ないかさまものだと非難する (Dickens 362)。この物語の語り手もまたアメリカを批判して、アメリカ人は自分たちの国を正直な人びとの軽蔑という退潮にさらして、まだ生まれ出でぬ国家の権利と人類のまさに進歩とを危険にさらしているのを、そこの街路でころがりまわっている豚と同様に、感知できず、また、たとえ感知し

でも、それを気にしてはいないのだと述べ、さらに、たったきのう崇高な門出をしたのに、もうきょうは足が不自由になり、傷とできものだらけで、目には醜悪、分別の眼にはほとんど絶望的になり、この上ない好意をいただいている友人でさえ、そこの忌まわしい人間どもから嫌悪の情で面をそむけてしまうようになった共和国と批判する。そして独立を宣言し、それを獲得したのに、彼らは悪にうつつをぬかし、善に背をむけていると非難する (Dickens 370)。

③の唾を吐くことは『アメリカ紀行』では第 8 章のワシントンでの体験として語られる。ディケンズはワシントンをタバコ臭唾液総本部と名付け、彼にとってタバコを噛み、唾を吐くというこの二つの忌まわしい習慣の流行が不愉快そのもので、アメリカのあらゆる公共の場所で、この汚らしい習慣が目についたと述べている。つまり法廷では裁判官、廷吏、証人、囚人用の痰壺があり、病院では医学生のための箱があり、蒸気船では傍若無人に甲板をよごす紳士がいた。国会議事堂でも同様で、じゅうたんが台無しになっていた。

『マーティン・チャズルウィット』では第 16 章でつばを吐くジェファソン・ブリックが登場する。彼はニューヨーク・ラウディ・ジャーナルの若い戦争通信員で、タバコを過度に愛用し、いつもそれをムシャムシャとしきりに噛んでいて、その結果、不健康そうな青白い顔をしていた (Dickens 261)。ブロードウェイ近くの家をマーティンが訪れると、そこにあるストーブの両側に大きな真鍮のたんつぼがあり、その前で揺り椅子で体をゆすりながら、帽子をかぶった大柄な紳士がもたれかかって坐り、ストーブの右側と左側のたんつぼに交互につばを吐いて楽しみ、順序をくずさずに、それをくりかえしていた (Dickens 266)。ジェファソン・ブリックはこの紳士、ポーキンズ少佐をアメリカで一流の注目すべき人物だとマーティンに紹介するが、語り手は少佐がいかさまの実にすばらしい天才の持ち主で、銀行を創設し、公債のとりきめをやり、土地投機の会社を (何百という家族に破滅、疫病、死をもたらしたのだが)、合衆国のどんな才能ある人物ともぐるになって、結成することができたことと真実を暴露している (Dickens 268)。

④の新聞、雑誌について『アメリカ紀行』では、第 18 章の結びの言葉の中に厳しい言葉がある。すなわちアメリカの新聞界は品性下劣なのでアメリカにおける高潔な道徳的進歩は絶望的で、新聞界がすべての家にその邪悪な目を光らせ、国のすべての官職に黒い魔の手を伸ばしている間は、また、下劣な中傷行為を常套手段としてはばからないような新聞が大衆階層の平均的な読み物である間は、忌まわしい怪物がずっとこの国の頂点に君臨し、それがその間ずっと生み出す害悪がこの共和国に歴然と存在し続けるに違いないと批判されている (Dickens 248)。

『マーティン・チャズルウィット』ではアメリカに渡ったマーティンがアメリカの新聞を批判する。その新聞の名前はニューヨーク・ラウディ・ジャーナルで、ラウディ (Rowdy) には乱暴者や荒くれ者の意味があるので、作者ディケンズがこのように新聞を名付けた意図が感じられる。編集者はダイヴァー大佐で、彼はこの新聞がこの町の貴族階級の機関紙で、貴族階級は知性と美德とドルで構成されていると説明する (Dickens 258)。大佐は戦争通

信員のジェファソン・ブリックの論文がイギリスの貴族社会を震えあがらせたと考えているが (Dickens 262)、マーティンは新聞のとじこみの切り取りをするブリックの姿を滑稽だと感じ、新聞についても文書の偽造を平気で行なうインチキ新聞だと酷評する (Dickens 264)。

⑤若い女性のエピソードは『アメリカ紀行』では、小さな赤ん坊を連れた小柄な女性について、自宅はセント・ルイスだが、ニューヨークにいる病気の母親の所で長いこと過ごし、その間に赤ん坊が生まれていた。結婚後一二か月して夫の元を離れ、12ヶ月も彼に会っていなかった。そして今帰るところだった。彼女は希望、優しさ、愛情、不安で満ちあふれ、セント・ルイスの明かりが見えてくると、いったんは自分の船室に閉じこもったが、波止場に着くと、立派で、ハンサムで、たくましい体格の若者の首に両腕を回してしっかりとしがみついた (Dickens 172-174)。

『マーティン・チャズルウィット』では第15章で快速定期航路船「スクルー号」の三等船客のイギリス人、アイルランド人、ウェールズ人、スコットランド人の中に、膝に赤ん坊を抱いたあわれな女がいて、別の子供の服のつくろいをし、さらに別の子が彼女のまわりをばって外に出ようとしていた。彼女は夫に会うために航海していた (Dickens 248-249)。第33章で彼女は開拓地エデンで夫と共に苦勞する様子がマーティンとマークによって目撃されている。彼らは青ざめてやつれ、母親が膝に抱いている子は熱病にかかっていた (Dickens 515)。

以上①～⑤まで『アメリカ紀行』と『マーティン・チャズルウィット』の共通事項を取り出して比較した。特に⑤の項目についてはピーター・アクロイド (Peter Ackroyd) が *Dickens* の中で言及している。すなわち『アメリカ紀行』では夫が立派で、ハンサムで、たくましい体格の若者なのだが、『マーティン・チャズルウィット』の類似した話では夫は開拓地で苦勞しやつれ果てている。この差をアクロイドはディケンズの想像力が現実により暗い影を加えてキアロスクーロ (明暗対照法) に適合させたのだと主張する (Ackroyd 424-425)。

キアロスクーロ (明暗対照法) の要素も含めて、『アメリカ紀行』から『マーティン・チャズルウィット』への移行は、拡大、発展、深化の過程と考えられるだろう。『マーティン・チャズルウィット』では『アメリカ紀行』より厳しい現実の姿が描かれる。真実を見るマークの姿は、ジャーナリストで作家のディケンズ自身の姿そのものとも言える。マーク・タプリーは開拓地エデンで知り合いの家族に会うと、冗談を言いながらもちゃんとあたりを見回し、一家の希望のない状態を理解した (Dickens 515)。ジャーナリスト・ディケンズが事実を伝え、小説家・ディケンズがその事実を発展させたと思われる。

『アメリカ紀行』で大きな面積を占める刑務所訪問は、『マーティン・チャズルウィット』ではマーティンの一族であるジョーナス・チャズルウィットの父親殺しという犯罪に昇華、凝縮され、ジャーナリズムから小説への移行が見られる。さらに『アメリカ紀行』の17章の奴隷制度批判は『マーティン・チャズルウィット』の元奴隷キケロ1人の姿の中に昇華、凝縮され、やはり事実を伝えるジャーナリズムから小説への移行が見られる。

4. ディケンズの見たアメリカ開拓地

『アメリカ紀行』第12章のレイヴィル行き蒸気船「パイク号」では、ディケンズは乗客の1人、インディアンのチョクトー族の酋長であるピッチリンを賞賛し、彼らの部族が消えつつあると記述している (Dickens 165)。その後「フルトン号」でオハイオ川に出て行き、ミシシッピ川との合流点で、両岸の入植地の住民が弱々しく惨めな様子だと感じ、3日目に到着したケアロが荒涼としてわびしいと描写している。ケアロは湿地帯で、熱病とマラリアと死の温床で、「黄金の希望」の鉱山としてイングランドで吹聴されて、それに対する投機の結果、多くの人を破滅に導いた。そこは朽ち果てた家、非衛生的な草木、移住者たちの骨に覆われ、醜悪な墓場となっている (Dickens 171)。

Nor was the scenery, as we approached the junction of the Ohio and Mississippi rivers, at all inspiring in its influence. The trees were stunted in their growth [...] their inhabitants more wan and wretched than any we had encountered yet [...] Hour after hour, the changeless glare of the hot, unwinking sky [...]

At length, upon the morning of the third day, we arrived at a spot so much more desolate than any we had yet beheld, that the forlornest places we had passed, were, in comparison with it, full of interest [...] a breeding-place of fever, ague, and death; vaunted in England as a mine of Golden Hope [...] a place without one single quality, in earth or air or water, to commend it: such is this dismal Cairo. (Dickens 171)

『マーティン・チャズルウィット』第23章ではケアロが皮肉な名前の、生きて戻って来た人のいないエデンとなって登場する。そこはノアの大洪水の水が、たった1週間前にひいたような感じの沼地で、粗末な丸太小屋がわずかにあり、開拓民は色青ざめてやつれ悪性の熱病にかかっていた。彼の息子の1人は先週死んでしまっていた。マーティンとマークのみじめな小屋にはドアもなく、そのため家の中から荒れ果てたあたりの景色と暗い夜がすっきり見通しになっていた (Dickens 377-378)。

As they proceeded further on their track, and came more and more towards their journey's end, the monotonous desolation of the scene increased to that degree [...] they might have entered, in the body, on the grim domains of Giant Despair. A flat morass, bestrewn with fallen timber [...] where the very trees took the aspect of huge weeds, begotten of the slime from which they sprung, by the hot sun that burnt them up; where fatal maladies, seeking whom they might

infect, came forth at night in misty shapes, and creeping out upon the water [...] where even the blessed sun, shining down on festering elements of corruption and disease, became a horror; this was the realm of Hope through which they moved.

At last they stopped. At Eden too. The waters of the Deluge might have left it but a week before: so choked with slime and matted growth was the hideous swamp which bore that name. (Dickens 377)

『アメリカ紀行』のケアロと『マーティン・チャズルウィット』のエデンを描写する文章を比較すると、それらの扱う項目は荒廃した様子、湿地、太陽、病気、丸太小屋、住民などほとんど同じである。しかし『アメリカ紀行』が事実を並べるのみであるのに対して、『マーティン・チャズルウィット』はその場の恐ろしい状況をセミコロンでつなげた長い 1 つの文で『アメリカ紀行』よりも詳細に説明していく。さらに『マーティン・チャズルウィット』には Giant Despair (John Bunyan の *The Pilgrim's Progress* に登場する Doubting Castle の主) やノアの大洪水への言及があり、事実のみでなく、事実プラス登場人物たちの感情の動きが加えられて、彼らの絶望をより深く映し出している。単なる客観的な事実ではなく、主観の加えられた記述となっている。そして絶望が最高点に達した時、主人公マーティンはドアも家具もない丸太小屋の地面に身を投げ、大声で泣き出す。

旅人としての『アメリカ紀行』、小説家としての『マーティン・チャズルウィット』には明らかな相違がある。前者は見聞した事実を伝え、後者は事実をもとにストーリーを展開させ、読者に強い印象を与える。ただ『アメリカ紀行』の直後に『マーティン・チャズルウィット』が書かれたために、この 2 作品は共通事項も多い。アクロイドは *Dickens* の中で『マーティン・チャズルウィット』には滑稽な要素が凝縮されていると指摘し、旅行記で描写された行き当たりばったりの経験がまとめられ、主題となっていると述べている (Ackroyd 424)。『アメリカ紀行』の最後の章、第 18 章の結びの言葉でディケンズが述べたように、彼は真実を書き、小説の中でもその真実を深く追求したように思われる。

おわりに

『アメリカ紀行』のケアロと『マーティン・チャズルウィット』のエデンは単なる開拓地にとどまらずアメリカという国家を象徴する場所になっている。エデンの開拓者ハンニバル・チョロップはアメリカ人を代表してイギリス人マーティンとマーク、そしてヨーロッパを批判し、自分を自由崇拜者でリンチ法と奴隷制度の支持者と述べて、語り手から拳銃とナイフを振り回す乱暴者と非難されている。さらにアメリカ人に対しては『アメリカ紀行』第 17 章で奴隷制度が激しく批判され、『マーティン・チャズルウィット』でも第 17 章で元奴隷の悲惨な様子と共に、アメリカ人女性の黒人に対する偏見が描かれ、間接的に奴隷制度を支持するアメリカ人を厳しく非難している。

アメリカ人に対する激しい否定的な感情と対照的に、ディケンズは監獄に収容された苦しむ人々、アイルランド人、インディアン、そして奴隷となった黒人には同情を示している。アイルランド人に対しては『アメリカ紀行』第6章で穴を掘り、穿ち、汗水流して働き、家事をし、運河や道路を造り、「国内開発」の大計画を実行する労働者が描写され、ディケンズは彼らが奇妙くてれつな文字で書かれた住所を探す手伝いをした(81-82)。さらに第11章ではシンシナティへ向かう「メッセンジャー号」の乗客の中に、新しく見つかった銅山に住みつくために出かける男がいて、村人となる人たちも連れている。その一部はアイルランド人であった(159)。同じ章にはディケンズが目撃した禁酒大会の催しについての記述もあり、そこに参加したアイルランド人について、行く手に立ちふさがりいかなる厳しい労働をもやり遂げ、生きて行こうという思いから、誰よりも一生懸命働き、最も独立心の強い人々だとディケンズは思った(162)。彼のアイルランド人に対する気持ちには哀れみ、同情、愛情、尊敬が混在している。

『マーティン・チャズルウィット』では第15章で、定期航路船「スクルー号」の三等船客の中にアイルランド人がいて、貧困や病気に苦しみながらもお互いに助けあっていた(248)。第17章では召使いのアイルランド人が登場し、権利と原則の点からいって、当然ぼろ服をまとっているべきだと述べられている(284-285)。さらに第21章ではアイルランドのダニエル・オコネルが奴隷解放の擁護者だとアメリカ人から非難されるのを目撃し、マーティンはアメリカに失望する(361)。この作品からもディケンズのアイルランド人に対する同情と共感が感じ取れる。しかしその同情もディケンズの持つ優越感の裏返しのように、もうこの時期から差別感情や *racism* は彼の心の中に存在していたと考えられる。

本稿で比較した『アメリカ紀行』(1842年)と『マーティン・チャズルウィット』(1843-44年)は“The Noble Savage”(1853年)につながっている。“The Noble Savage”の *racism* のきざし、前兆が『アメリカ紀行』と『マーティン・チャズルウィット』の中のディケンズのアメリカ人蔑視に見られる。アメリカ人は同じ人種なのに、まるで違う人種のように見下して非難する。30代になったばかりのディケンズの心の中にあつたこの傾向が激化して40代のディケンズによる“The Noble Savage”の *racism* となったのではないだろうか。

“The Noble Savage”ではディケンズはアフリカの狩猟民族ブッシュマンを忌み嫌い、彼らを殺害するのが正当な殺人だと主張する(469)。また南アフリカのズールー族とカプイル人の場合は酋長の演説を聞く時に騒がしいので、それがアイルランド下院議会や選挙の状態とよく似ていると、アフリカもアイルランドも両方一緒に否定している(472)。1840年代に示していたアイルランド人にたいする同情も、奴隷制度を嫌悪する気持ちも、激しい差別意識の前に消え去っている。

ディケンズのジャーナリスト、そして小説家としての目は公平にすべての人々に向けられ、彼の批判を逃れられる人は少ないようである。『アメリカ紀行』第8章で、現在アメリカに住んでいるイングランド人は最低のアメリカ人旅行者が持っている不愉快な特性をすべて身に着け、横柄なうぬぼれや無作法な馴れ馴れしさなど、最も我慢ならない、最も耐え

難い人間で見るもおぞましいと述べられ、アメリカ人以下だと酷評されている。

ディケンズは1870年の彼の死に至るまで、『ハウスホールド・ワーズ』(1850-1859)、『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』(1859-1870)のような雑誌を編集し続け、最後までジャーナリストであることをやめなかった。また小説も『エドウィン・ドルードの謎』(*The Mystery of Edwin Drood*)を死の直前まで執筆し続け、物語が未完成のままに亡くなった。生涯、小説家、そしてジャーナリストとして真実を追求し続けた。

◎本稿は2014年10月18日(土)開催の法政大学英文学会での発表を修正、加筆したものである。

引用文献

- Dickens, Charles. *American Notes and Pictures from Italy*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1987.
- . *The Life and Adventures of Martin Chuzzlewit*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1987.
- . “The Noble Savage.” *The Uncommercial Traveller and Reprinted Pieces*. The Oxford Illustrated Dickens edition. Oxford: Oxford UP, 1968.
- Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1991.
- Collins, Philip. ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1971.
- Drew, John. ‘Dickens as journalist’ in *Oxford Reader’s Companion to Dickens*, ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens*. Vol.1. Cambridge: Cambridge UP, 2011.
- 植木研介「1. ジャーナリズム」『ディケンズ鑑賞大事典』南雲堂、2007.
- 大野真弓編『イギリス史』山川出版社、1980.
- 川澄英男「アメリカ紀行」『ディケンズ鑑賞大事典』南雲堂、2007.
- 『ディケンズとアメリカ——19世紀アメリカ事情』彩流社、1998.
- ディケンズ、チャールズ『アメリカ紀行』(上)(下)伊藤弘之・下笠徳次・隅元貞広(訳)岩波文庫、岩波書店、2006.
- 『マーティン・チャズルウィット』(上)(中)(下)北川悌二(訳)、ちくま文庫、筑摩書房、1993.
- 『英文學誌』第57号(2015年)、法政大学英文学会に掲載